

施設介護実習を終えて

家政科生活福祉専攻

青木君代

京都短期大学家政科生活福祉専攻は、平成9年4月より介護福祉養成施設として、厚生省の認可を得て定員40名で発足し、京都北部では唯一の養成校となりました。

介護福祉士養成に当たっては、実習はウエイトの高いものとなっており、特に学外実習の施設介護実習は、450時間（10単位）で、実習施設の認可に於いても開設3年以上となっており、近隣に於いて、開学当初該当する施設がなく、遠く丹後町、京北町、亀岡市、丹波町、但東町、舞鶴市等の諸施設の承諾を得ました。

その内訳は14の施設が特別養護老人ホームで、2施設が身体障害者療護施設です。

実習先が遠方の上、交通の便が悪い為、実習前後の送迎は学校がバスや自動車を用意し、実施しました。又実習期間中全員宿泊を前提としています。

実習施設への巡回指導は、週2回と義務づけられており、教員全員がその任に当たります。又学生の配置メンバーに於いても教員全員の合意の基に決定しております。

巡回指導は1施設1時間とし、学生にきめ細かな指導と共に実習担当者との情報交換や、中間、最終カンファレンスにも参加し、学生の実習状況のチェックと、諸問題の解決や今後の実習の方向付けとしました。

【介護実習】に於いては厚生省が示している〔学生の講義、演習、学校内実習の進度に応じて3段階に分けるのが望ましい〕とされており当校も1段階で2週間、2、3段階で各4週間としています。各段階の実習前に1日を事前学習日とし、実習終了後に2日間の報告会とします。いづれも学生の出席は勿論の事、教員も全員参加し意見交換や、指導に当たります。又実習終了後の報告会に実習施設の指導者へ出席依頼したところ、少しずつではありますが、出席が増えていく傾向にあります。

施設懇談会は例年5月に実施し、施設側より施設長、実習担当者の参加を頂き、学校側より学長、事務部長、教官でもって学生指導の方向性の統一や情報交換の場とします。

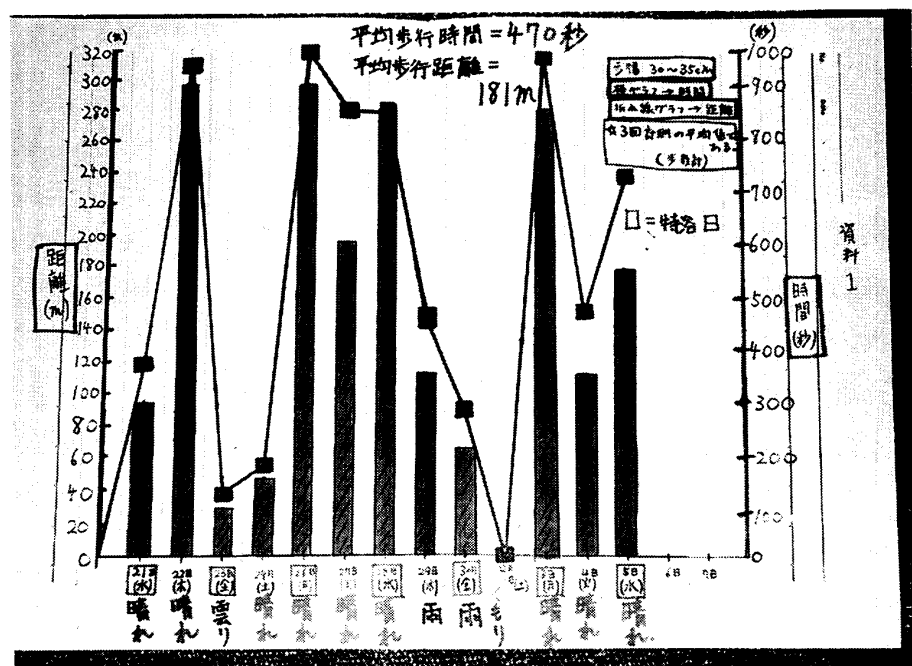
毎回半数以上の施設の参加がありました。

平成13年度の第3段階の報告会は、さる12月21、22日の2日間にわたって実施しました。特に第3段階の実習目標は、施設介護実習の総まとめとして位置づけ、日常生活援助技術を高め、施設運営のプログラムにも参加し、処遇全般について理解すると共に、個別介護過程の展開をし、チームの一員として介護を遂行出来ることとしました。

実習終了後10日間余り、各学生は夜遅くまで報告会に向けてまとめをしました。

この報告会に於いては、原則として1、2回生全員が出席することとしていますが今年度はカリキュラムの関係で1回生は22日のみの参加となりました。

発表当日、学生達の表情は大きな課題を成



し遂げた時の充実感で生き生きと目が輝き一段と大きく私の目に写りました。

今回の発表に於いて1人10分とし、質疑応答等を含めて中には20分位かかる学生もありました。発表内容は個別介護過程の展開とし、先ず担当利用者の情報収集、問題、ニーズの把握、目標の設定、介護方法の選択（介護計画）実施、結果、評価、考察、変更修正といった一連の過程を体験学習したものでした。又発表するに当たり、反省点や考察に於いて、相当の時間を費やし、より介護過程全般の科学的な裏付けを明確にし、より介護の原点、原則をしっかりと再認識し、専門職者としての学びを深める機会としました。

学生達はさまざまな障害をもつ利用者との関わりの中で、対人関係に於いての一番大切なコミュニケーションでつまづいた者、又情報収集が未熟で問題点が明確に出来ない者、目標が具体的でない為に計画が抽象的になってしまっていて、実施がなかなか出来ない者、又実施中に目標から外れ再度目標を確認し直す者、受持ち利用者が2週間目に急変してなくなられた者、体調不良の為に計画を止む無く変更修正したものの実習終了前で実施出来なかった者等、多くの学生がさまざまな介護過程の場面で困難に直面する事により、その体験の中から介護過程の意義を得ることが出来ました。又宿泊前提としている事により生活面での学生間の助け合いや、実習における意見交換等より実習効果が高められるといった面もありました。

今回の発表の中で学生が援助の目標としたのは、第一位が自助具の活用、第二位が趣味活動、第三位は残存能力の維持と回復を図る、となっておりその他に排泄援助への取り組みや、褥瘡予防、といった内容でした。

これらの介護過程を展開をする中で、援助内容がそれぞれの利用者の生活の質を高めるものとなったり、又生きる喜び、楽しみになったり、生活行動面での拡大による社会参加への意欲

づけになる等利用者の主体性を尊重した働きかけを主眼に置いたもので、介護の理念にふさわしい援助であり利用者と共に喜びあう事の出来ることの幸福を実感するものとなったと考えます。そしてこれらの喜びは学生の心の中に大きな感動となり根づくものと信じています。

第一段階実習を2ヶ月後に控えた一回生は真剣な表情で聞き、先輩達の実習でどのような事を実習されたのかよく分かると共にそして個別介護というものがどれだけ難しいものであるかを痛感すると共に不安も大きいですが、頑張っで利用者さんの役に立てるようになりたいと実習の心構えが出来る良い機会となりました。

介護基礎教育が科学的思考を基盤とした介護実践力であることから、この報告会を通して、学生は苦しみながらも、少しずつではあるが介護とは何か、介護の原点を、実践を通して実証することが出来たのではないかと考えます。又福祉、保健、医療全般に亘る広い視野とチームケアの一員として知識、技術を身につけると共に豊かな人間性を持つことの重要性を学び取ったと考えます。この学びを深めるに当たって、施設指導員、寮母の方々、利用者の方々の計り知れない暖かいご指導とご援助を戴いたことに対して心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

この報告会を取り組む中で学生の介護に対する熱い情熱と強い誇り、意志を肌で感じたり又学生の無限に広がっていく思考力の柔軟性に改めて感動したり、又学生とともに多くの共感を得た事は学生との触れ合いの豊かさが、各学生の内面の充実に役割を果たしたのではないかと考えます。そして自分自身の持つ豊かさや力量、見識以上のものを学生に、プレゼントすることは出来ないということを、しっかりと心に留めて学生に関わって行きたいと思います。



殆どの学生が実習最終日に利用者から、ありがとう、頑張ってたね、ご苦労様でしたと、涙乍らに言って頂いた利用者の真心のこもったプレゼントを心の糧として、今持っている情熱を、主体的、創造的に行動するエネルギーに換え、今後の福祉の道に、持ち続けて行って欲しいと、願っています。

高齢社会の進む中で、介護への期待は大きくなって行きます。より質の高い、そして人間性の豊かな介護福祉士を養成するに当たり、養成校、実習現場、介護福祉士会の三者間でそれぞれの立場からの観点を重視した、共通の認識や理解が重要であり、その為の努力を惜しまず何よりも社会の期待に応えるべく、人材の育成に心血を注がなければならないと痛感しています。

そして介護は、実践（学習）から学問が出発するという立場から、施設の実習担当者の研修や、人権費用の手配、施設内での指導者としての身分の保障等、国の政策の中で早急に、取り組んで戴きたいと、念願します。

学内に於いては、教員が一丸となってアイデアを出し合い、学校内外を問わず福祉社会の情報を迅速に且つ的確に把握し、それを共有出来るシステム作りと同時にチームワークをいかに高めて行くかという事が大切であることと、卒業教育においても全国的規模でのシステム作りと専門職能団体としての社会的な位置付けに向けて教育内容の充実を期待したい。